

5-10			
主 題	グループワーク「防災活動と安全パトロール」の試行とその結果について		
副 題	利用者様に、「意義」と「楽しみ」の両方を感じられる活動の提案		
レクリエーション	QOL 向上	研究期間	12ヶ月
法人名	社会福祉法人愛隣会		
事業所名	養護老人ホーム白寿荘		
発表者：三輪昭人（みわ あきひと）	アドバイザー：海老沼達雄（えびぬま たつお）		
共同研究者：岡村幸子、今津友里			
電 話	03 - 3466 - 0267	FAX	03 - 3466 - 6258
今回発表の事業所やサービスの紹介	キリスト教の隣人愛を基本精神として高齢者の日常生活の為の支援を行っている養護老人ホーム。入所者数168名。渋谷駅までバスで5分、東京大学駒場キャンパスや筑波大学附属駒場中・高校に程近く、閑静な住宅街に囲まれた施設です。		
《1. 研究前の状況と課題》 当研究は、「主に男性利用者様が施設内で人間関係を構築することに抵抗があり、生きがいを見出しにくい。結果として、動きの少ない生活を送りがちになる。利用者様の意思を尊重しながら、社交や活動の機会提供が行えれば、生活全般の充実感をより得られるのではないだろうか」と仮定し、2012 年1月から行ってきた試行の一つである（本研究では以上の男性利用者様をA群と称する）。活動を通して、クラブ活動、行事、ミニハイク等の既存のサービス提供が、多様化しているニーズを満たし得ていないのではという仮定ができた。他方、利用者様の多様化によって、様々な問題行動や地域とのトラブルが顕在化し、個別支援のみによっては、利用者様の安定した安全な生活が維持しがたい状況があった（以上の利用者様をB群と称する）。 《2. 研究の目的ならびに仮説》 A群へのヒアリングによって、そのニーズを以下に要約することができた。		① 何かしたいが、何をしたいかわからない。退屈している。（「楽しみ」の喪失） ② やりがいのあることや、ひとの役に立ちたいが、何ができるかわからない。（「意義」の喪失） 以上の結果から、活動性が落ち、自己肯定感が得られにくい状態が観察された。また、B群は、認知症や様々な障害によって、安全への配慮から外出に一定の制限を設けている利用者様から成っている。B群へのヒアリングとアセスメントから、そのニーズ・課題を以下に要約することができた。 ① もっと外出がしたいが、お独りでは安全が確保できない（徘徊や転倒など）。 ② 地域で問題行動（他家の草花の回収、拾い煙草、落書きなど）をとってしまう。 以上の結果から施設での生活を困難としてしまう。「楽しみ」「意義」「外出支援」「問題行動予防」をキーワードとして、2014 年7月、「防災活動と安全パトロール」を始動した。 《3. 具体的な取り組みの内容》	

i 災害についての学習、ii 防災設備点検の実施、iii 安全を呼び掛けるパトロールの実施（B群から外出希望者の同行）、以上の提案を利用者様から成る自治会にて行い、A群から14名の賛同者を得た。また、施設に提案レクチャーに準じる扱いとし、職員が仕事として、継続的に取り組める環境を整えた。具体的活動内容としては、目黒区の防災館にてレクチャーを受け、消火器・煙体験をし(i)、月1回30分で各居室の非常灯のバッテリー確認、防災頭巾確認、共有部分の消化バケツの水の交換を実施、またその報告書を作成し利用者様が施設に報告する(ii)、月2回20分で、ユニフォームを着用して敷地内のパトロールを行う、パトロールには職員が2名以上付添いB群の外出支援も併せて行う(iii)。

《4. 取り組みの結果》

評価方法は、①利用者様・職員からの聞き取り、②アンケートに基く主観的方法と、③事故・問題行動の発生件数という数値化可能な客観的方法によって集計した。また情報源によってA郡はa、B郡はb、職員はsとした。①②の方法から評価を以下に分類できた。

- ・「楽しい、嬉しい、待ち遠しい」(a,b,s)
- ・「やりがいがある、勉強になる」(a,s)
- ・「外出・挨拶ができて嬉しい」(b,s)
- ・その他：「災害対策は有り難い」(a,b外利用者様)、「ユニフォームがカッコいい」(a,s)、以上のポジティブな意見が聴かれる一方、以下のネガティブな意見もあった。

- ・「あいつが一緒ならやりたくない」(a)
- ・「仕事をやらされているのか」(b)
- ・「(防災設備点検は)他の男性が訪ねてくるから驚くことがある」(a,b外の利用者様)
- ・「業務の合間に充てる負担が大きい」(s)

③の方法では、2015年4月-6月の(A+B)群の「外出中の問題行動及び転倒事故」件数を、2014年4月-6月のそれと比較したが、有意差は無かった。他方で、(A+B)群で20名の利用者が定期的外出の機会を得た。

《5. 考察、まとめ》

「楽しみ」と「意義」の獲得に当研究は資するこ

とができた。他方で、当初予期しない副次的効果が以下のようにあった。一つは、挨拶。利用者様同士の、併設する他施設利用者様とのコミュニケーションの促進である。一つは、傾聴の機会の獲得。活動中の利用者様を見守り、歩きながら傾聴する時間を確保できた。日頃は顕在化し難い利用者様の気持ちやニーズを、歩くという行為や外出先という環境によって無理なく引き出すことができた。一つは、利用者様の安心と生活リズムの獲得。対職員への和やかな声かけが増え、夜間良眠がとれている印象があった。当研究は、実績を集積すれば、更に有効性が確認できると考察され、その為の課題となるのが、①継続力、②活動を魅力的に伝え、利用者様・職員を巻きこむ提案力、③ニーズを捉え内容を工夫する柔軟性をあげることができ。新たな活動は必ずリスクを伴うが、それを乗り越えるのも、やはり「楽しい」と「意義」がキーワードになる。この活動に参加できて、自他共に幸せで、幸せな状態の為に努められるのは意義深いことだと感じる事ができれば、課題は乗り越えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人様に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・新・社会福祉学習双書編集委員会(1998)「社会福祉援助技術総論」社会福祉法人社会福祉協議会発行
- ・石井千恵、梅田陽子、小関潤子、松浦亜紀子著(2015)「すぐ役に立つ脳と心の介護予防フィットネス」誠文堂新光社
- ・公益財団法人東京防災救急協会(2011)「防火防災管理の知識」東京消防庁監修

《8. 提案と発信》

養護老人ホームの利用者様の潜在能力は大きく、可能な限り発揮できる環境を用意できれば、利用者様の充足感は増し、周辺利用者様や地域へ好影響が及ぶと考える。多くの方が自分らしく、笑顔で、地域の一員として生活できるよう努めていく。